国立国語研究所学術情報リポジトリ

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2020-03-18 キーワード: 作成者: 三井, はるみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002738

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト紹介

三井　はるみ

（国立国語研究所）

１．はじめに

国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」（以下，本プロジェクト）では，Web による研究成果の発信を企画し，2013 年 6 月 30 日に，４種の資料・データベースを公開した。ここでは，それら４種の資料・データの紹介を行う。

本プロジェクトは，「首都圏の言語の総合的研究の基盤を築くこと」を目的として，(1) 研究会活動，(2) 新規調査研究活動，(3) 研究資産の再構築，の三つを活動の柱として展開してきた。資料・データベースの Web サイトでの公開は，このうちの，「(3)研究資産の再構築」に関連して行うものである。

２．プロジェクト成果公開サイトの概要

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト(以下，プロジェクトサイト)は，国立国語研究所サイトの中にある（http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/）。研究所トップページから，「トップ>研究活動>共同研究プロジェクト>萌芽・発掘型>首都圏の言語の実態と動向に関する研究>プロジェクトのＨＰ」とたどることで到達できる（右図）（2014 年 1 月 20 日現在）。現時点では，Google 検索で「首都圏言語」と入力して検索すると，当サイトが最初に表示される。プロジェクトサイトトップページは次ページのとおり。

図１　プロジェクトサイトトップページ
（http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/）

コンテンツは次の５つである。

(1) 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する研究

2012 年に実施した，首都圏８大学の学生を対象とした言語調査の結果報告。

38 項目に関する分布地図（１項目につき，関東・全国各１枚）を示し，項目ごとに解説を付した。

(2) 東京のことば研究者インタビュー

東京・首都圏の言語研究の第一人者であり，かつ，御自身が東京のことばのネイティブスピーカーでいらっしゃるお二人の先生方（田中章夫先生，野村雅昭先生）へのインタビュー（2012 年実施）。各約 10 分程度の動画と文字化。

(3) 首都圏の言語に関する研究文献目録

東京都（島嶼部を除く）・埼玉県・千葉県・神奈川県の１都３県の言語に関する研究文献目録。図書，論文，発表予稿集を含む。2013 年 6 月 30 日現在 1951 件を採録。文字列検索機能あり。

(4) 東京語アクセント資料

柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』上・下（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）を，原著者の了承を得て電子化し，検索機能を付した。全データを Excel 形式でダウンロード可。併せて，原著書に収められていなかった調査票を電子化して公開。

(5) 研究成果

書籍，報告書，論文，学会発表，プログラム，データベース，研究会記録等，本プロジェクトの研究成果のリスト。

各コンテンツは，トップページのコンテンツタイトルをクリックすることで開けるほか，左メニューを展開して，各コンテンツの各ページに直接アクセスしたり，検索を行ったりすることができる。なお，(1)〜(4)は，今後，それぞれ独立したデータベース・データ集として，「国立国語研究所データベース・データ集」(http://www.ninjal.ac.jp/database/)のページから直接リンクが張られる予定である。

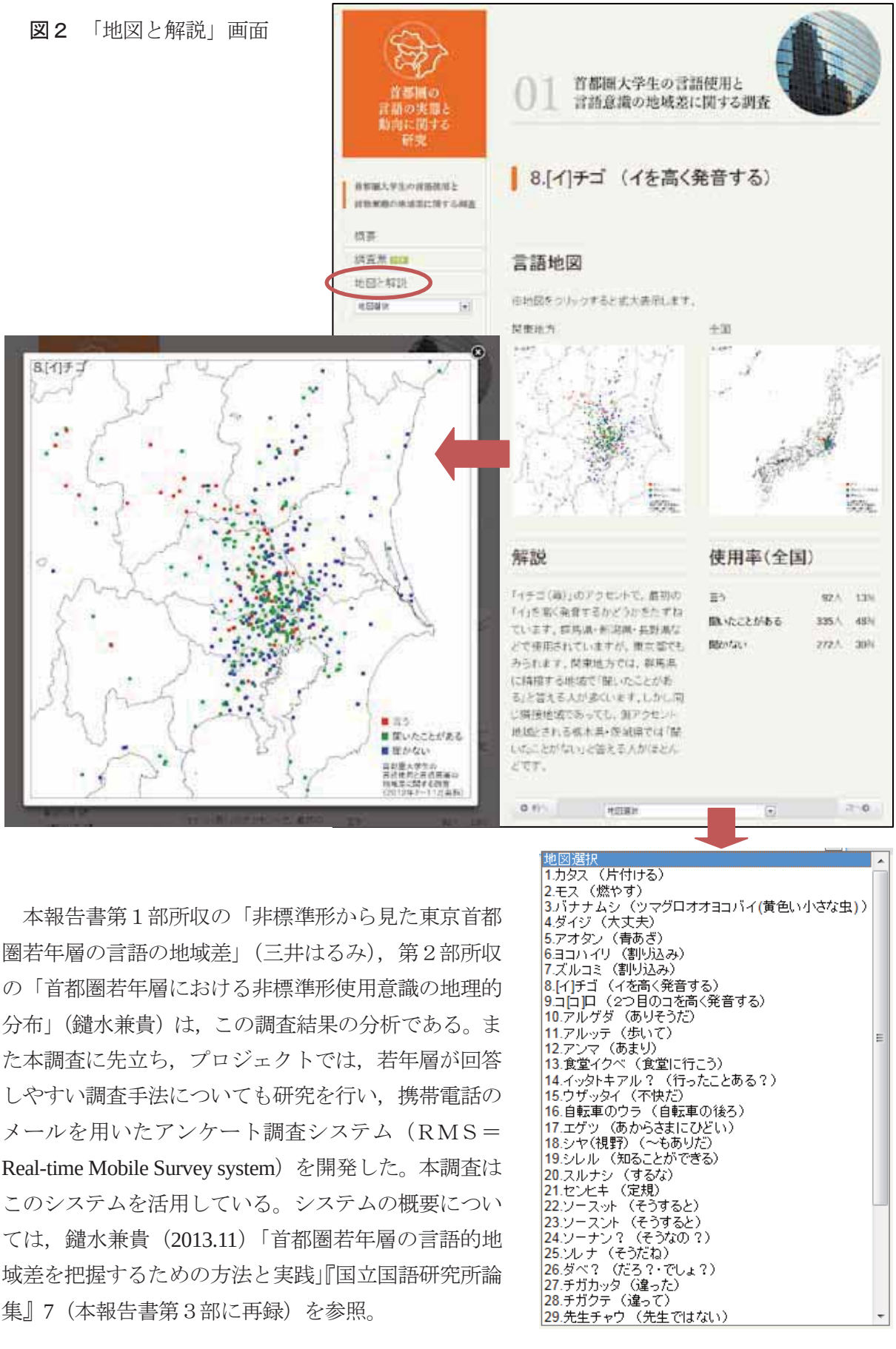
以下，(1)〜(4)の各資料・データベースについて説明を加える。

３．首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する研究

首都圏の若年層における言語の地域差を調べるため，2012 年度に首都圏の大学生に対して実施した，言語使用と言語意識に関するアンケート調査の結果報告である。「概要」「調査票」「地図と解説」から成る。

「地図と解説」では全調査内容のうち，語形の使用に関する 38 項目について，分布地図（関東地方と全国）と全国使用率を示し，解説を付した。項目は「地図検索」の検索窓から選ぶことができる。地図はクリックにより拡大表示することができる。（**図２**）

図２　「地図と解説」画面



本報告書第１部所収の「非標準形から見た東京首都圏若年層の言語の地域差」（三井はるみ），第２部所収の「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」（鑓水兼貴）は，この調査結果の分析である。また本調査に先立ち，プロジェクトでは，若年層が回答しやすい調査手法についても研究を行い，携帯電話のメールを用いたアンケート調査システム（ＲＭＳ＝Real-time Mobile Survey system）を開発した。本調査はこのシステムを活用している。システムの概要については，鑓水兼貴（2013.11）「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」『国立国語研究所論集』７（本報告書第３部に再録）を参照。

４．「東京のことば」研究者インタビュー

４．１　内容

2012 年に実施した，田中章夫先生，野村雅昭先生のお二人の先生方へのインタビューから，エピソードトークの一部，各約 10 分程度の動画と文字化を公開した。

実際の画面は**図３**のとおり。プロジェクトサイトトップページ，または左メニューから「「東京のことば」研究者インタビュー」に入ると，「概要」の下に，「田中章夫先生インタビュー」「野村雅昭先生インタビュー」の順に，それぞれ「経歴」「収録データ」「動画」の項目がある（A）。「動画」の項目の写真またはタイトルをクリックすると，「利用条件」画面が現れる（B）。同意する場合は「同意して閲覧する」をクリックし，動画と文字化のページに移る（C）。動画をクリックすることで再生できる。掲載した文字化は，あいづち，言いよどみなどをある程度忠実に反映した，漢字平仮名交じり表記である。スクロールすることにより，動画の進行に合わせて見ることができる。

４．２　企画の経緯

首都圏の言語の研究には，方言研究，近代語研究，社会言語学的研究といった，様々な背景のもとで行われてきた蓄積がある。またその中核となる，「東京のことば研究」に関しては，東京出身の研究者による，母語話者としての自らの内省と観察を深く反映させた研究が行われてきていることが，大きな特色である。

そこで本プロジェクトでは，東京・首都圏の言語研究の第一人者であり，かつ，御自身が東京のことばのネイティブスピーカーでいらっしゃる先生方に，お話しをうかがい，同時に記録させていただく機会を得たいと考え，「東京のことば」研究者インタビューを企画した。

これまでに，田中章夫先生（1932(昭和 7)年，赤坂生まれ，2012 年 5 月 6 日収録），野村雅昭先生（1939(昭和 14)年，元広尾生まれ，2012 年 12 月 7 日収録）からお話しを伺うことができた。

インタビューの内容は，大きく，①「東京のことば」研究についてのお考え，②かつての東京の様子・生活などに関するエピソード，に分かれる。このほかに，若干の項目について調査票を用いた言語調査に応じていただいた。収録後，すべて文字化を行った。

先生方の「東京のことば」研究についてのお考えは，御自身の研究の軌跡に発し，学界の研究状況を広く見渡し，具体的に取り組むべき課題をもお示しいただくという，我々にとってたいへん示唆に富むものであった。また，エピソードトークは幅広い話題にわたったが，特に，昭和 20 年前後の時代のお話しは，先生方の個人的なエピソードの中に当時の東京の社会状況がまざまざとうかがわれ，非常に興味深い内容であった。

お忙しい中お時間を取ってお話しをお聞かせくださり，また，このような形でインタビューの一部を公開することをご承諾くださった先生方に感謝いたします。

４．３　公開部分の選定

公開にあたっては，２時半から３時間に及んだインタビュー全体の中から，ひとまとまりの内

図３　「「東京のことば」研究者インタビュー」の画面

容を持ち，かつ，先生方のお話しぶりがよく現れていると思われる，連続した 10 分程度の部分を選定した。「「東京のことば」研究者インタビュー」ということであれば，まずは研究に直接関連する部分の公開が期待されよう。ただ，多岐にわたる内容の一部のみを切り取った場合，意図が正しく伝わらないなど，支障が生じることが懸念された。また，お話しぶり，という点では，なんと言っても，印象的なできごとをお話しくださっている時に，生き生きとしたくつろいだ語り口でいらっしゃると感じられた。そこで今回はまず，②のエピソードトークの一部を動画と文字化で公開させていただくこととした。インタビュー全体については，別途，公開の方法を検討中である。

今回収録させていただいたインタビューは，お話しの内容はもちろんだが，それに加えて，東京都心部のネイティブスピーカーの談話としても，記録に止めさせていただくべきものと考えている。今後は，その観点からの分析も行っていきたい。例えば，談話標識の現れ方に着目することにより，話の運び方の「東京らしさ」を浮かび上がらせる，といった分析等が挙げられよう[1]。

５．首都圏の言語に関する研究文献目録

５．１　内容

研究を進めるために最も基本的な研究資源として，研究文献目録を作成した。2013 年 6 月 30 日の公開時点で，「図書」「論文」「予稿集」合わせて，収載件数 1951 件，である。

Web 版では，文字列検索により検索，絞り込みを行うことができる。**図４**は，検索語「山の手」で絞り込みを行った結果である。

５．２　作成の経緯

「首都圏の言語に関する研究」は，対象地域も方法論も限定しにくいが，文献採録にあたり，ここでは，「首都圏の言語の総合的研究の基盤を築く」というプロジェクトの目的に照らして，対象地域・方法論とも，「あまり限定せず，できるだけ網羅的に」という方針をとった。具体的には，対象地域を「東京都（島嶼部を除く），埼玉県，千葉県，神奈川県」の１都３県とし，方法論や言語分野にかかわらず，地域の言語を対象として意識している研究であれば，ある程度広くゆるやかに採用することとした。

文献情報は基本的に，既存のデータベースである，日本方言研究会編（2005）『20 世紀方言研究の軌跡』（国書刊行会），「日本語研究・日本語教育文献データベース」（国立国語研究所ＨＰ），「国立国語研究所蔵書目録データベース」（国立国語研究所ＨＰ），「日本方言研究会方言書目」（日本方言研究会ＨＰ）から，関連文献をピックアップした。それに，主要学会の近年の研究発表原稿集のタイトル，および，その他個人的に存在を把握した文献を加えた。

研究文献目録の作成は三樹陽介（作成時は國學院大學，公開時は韓国・朝鮮大学校，現在は国立国語研究所 所属）が担当した。本報告書第３部の「「首都圏の言語に関する研究文献目録」か

[1] 三井はるみ（2013）「話の進め方の地域差：相手に説明するときの話し方」（木部暢子他編著『方言学入門』第３章第２課①，pp.60-61）では，今回公開していない談話の一部を資料として，このような観点からの分析を試みた。

図４　「首都圏の言語に関する研究文献目録」検索例（「山の手」）

らみる研究動向」（三樹陽介）は，2013 年 6 月 30 日公開時点の文献目録に採録された「論文」を資料として，研究動向の分析を行ったものである。

５．３　補充・改訂

2013 年 6 月 30 日公開版を元にして，現在，目録の補充・改訂作業が進行中である。サイト公開後，担当を引継ぎ，現在は，吉田雅子（実践女子大学，共同研究者）が作業を行っている。2013 年 12 月 27 日に第 1 回改訂版を up した。この 2013 年 12 月 27 日改訂版をもとに，冊子版『首都圏の言語に関する研究文献目録』を作成した。

目録は今後も引き続き，補充，改訂，アップデートしていく予定である。特に，現在公開している文献情報は，「種別」「発行年月日」「編著者」「題名」「所収誌・書名」「発行地」「発行所」「ページ」という書誌情報のみであるが，今後は拡充し，「地域」「言語分野」「研究法」といった，研究情報を付加する予定で，準備を進めている。

６．東京語アクセント資料

柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』上・下（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）を，原著者の了承を得て電子化し，文字列検索機能を付した。また，原著に収められていなかった調査票の調査文を電子化し，初めて公開した。

図５ 原著上巻表紙

データの種類と形式は次のとおり。

① pdf 版

原著上下各冊全体を pdf 化したもの。

『東京語アクセント資料 上巻(あ-そ)』 (132MB)

『東京語アクセント資料 下巻(た-わ)』 (149MB)

② データ版

原著上下２冊（pp.1-1028）のデータを Excel 形式で電子化したもの（3.8MB）

③ データ検索

②のデータを対象に，文字列検索，絞り込みを行う。

④ 調査票

調査時に使用した調査票の調査文をテキスト形式で電子化したもの（209KB）

図６に，原著本文の例（最下段が「苺（植）」），**図７**に，「データ検索」を使って検索語「イチゴ／」で絞り込みを行った結果を示す。（なおデータ版には，原書にはない一連番号（「ページ」「見出し番号」「語形番号」「回答番号」）を付加している。）

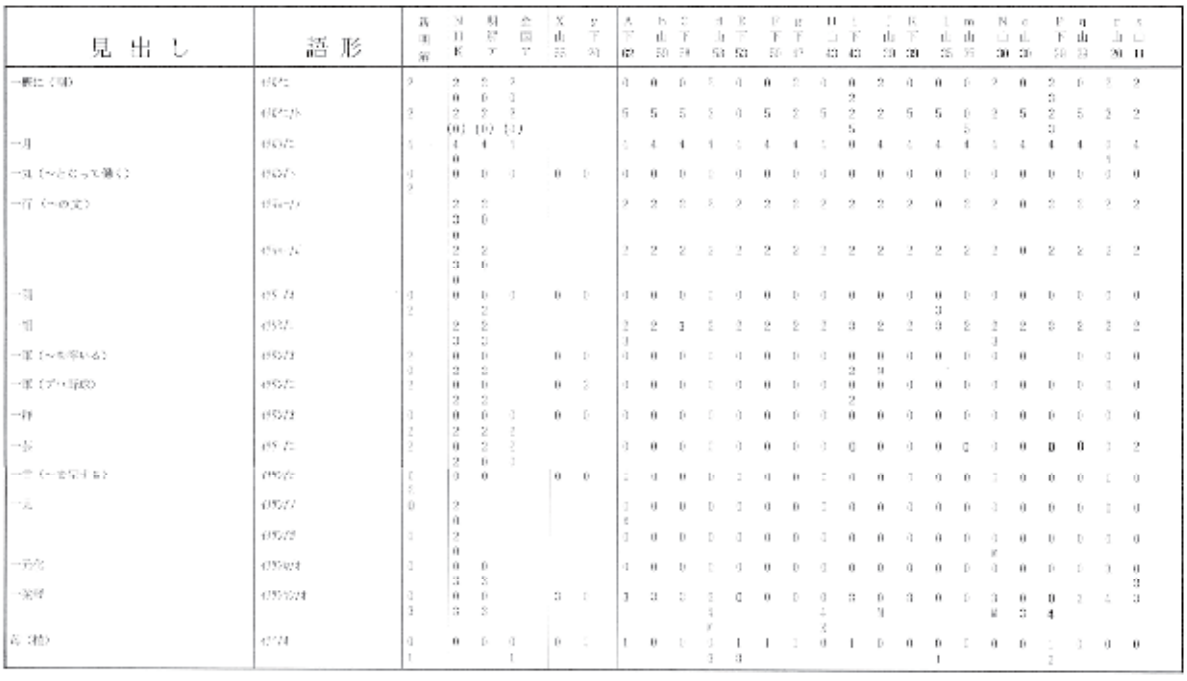


図６　原著本文（63 ページ）

図７ 『東京語アクセント資料』検索例（イチゴ／）

『東京語アクセント資料』は，現代東京語でアクセントゆれの予想された語についての網羅的多人数調査の結果である。今回データを電子化したことで，今後の分析の可能性が大きく広がった。電子化と公開をご承諾いただき，ご協力くださった関係者のみなさまに，感謝いたします。

７．おわりに

以上,「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイトの紹介を行った。ここで公開した資料・データベースは，プロジェクト共同研究者のみならず，多くの関係者の協力を得て完成した，利用価値の高い資料群である。今後は，これらの資料・データベースを活用し，研究を一層進展させていきたい。また，これらの有用な資料・データベースを，プロジェクト関係者以外にも広く利用してもらえるよう，機会を捉えてアナウンスし，首都圏地域の言語研究の活性化につなげていきたい。